

セレンディップの3人の王子たち



ガラス産業連合会運営・技術委員会委員長（HOYA 株式会社執行役）

萩原 太郎

Taro Hagiwara

3月11日に東日本大震災が発生して、約3ヶ月が過ぎた。この原稿が掲載される頃には、おそらく半年近くが経過していることだろう。地震の発生をきっかけに、津波、放射能汚染、電力不足、部品の供給不足など多くの問題が発生し、それらの影響の方が、地震の直接的な被害よりも、遥かに広範囲かつ長期に亘ることを思い知らされた。多くの方々が復興に取り組み、活動が軌道に乗ってきているようだが、大きな方向転換を伴う計画については、長い時間がかかることを覚悟する必要がある。特にエネルギー政策の転換について、これを機会に新たな議論が始まったことは、今回の経験を将来に活かすためにも、歓迎すべきことだと思う。

私が地震に遭遇したのは、ガラス産業連合会の会議に参加するために、日本ガラス工業センターの地下の会議室で、少し早めに来られた参加者と話をしていた時であった。地震の発生とともに会議室が、かなりの時間左右に大きく移動するのを体感した。地下の施設で大きな地震に遭遇したことは初めての経験であったが、地下室があんなに大きく横に動くものだとは、全く想像していなかった。高層ビルの上で地震を経験された方の話というのは、よく耳にするが、地下で会議を行うというのは、あまり多くないので貴重な経験かも知れない。

今後、復興を進めるに当たって、電力の不足と、日本の空洞化が大きな問題になるのではないかとされている。生産の海外移転は、確かにこの震災を機会に加速するかも知れない。しかし、エネルギー問題が、これまでの路線の方向修正を図ることになるかも知れない課題であるのに対し、生産の海外移転というのは、もともと、地域による人件費の格差や、税制の相違に起因していることであり、震災の有無にかかわらず、大きな潮流として進んできたものである。

今後の日本企業の、構造を考えるとときに、生産現場が海外に移る中で、日本企業はいか

にして、その技術力を維持強化して行くかを考える必要がある。これまで、多くの日本企業が生産の海外移管を進めてきたが、技術の源泉を海外に移した日本企業はほとんどない。現在の日本企業は、これまで日本の生産現場で育った技術者が、日本を拠点としてグローバルに生産技術を支えているというのが現状ではないか。しかし、今後は、生産活動のようないくつかの経営機能がグローバルに分散して行く中で、継続的に技術革新を続けてゆくためには、新しい企業構造の中で活躍できる人材を育成することの重要性が、一層増して行くように思う。

グローバルに活躍できる人材育成ということに関して、想起されるのは、「セレンディップの3人の王子たち」という話である。この話は昔のペルシャの寓話であるが、この本の存在を際立たせているのは、セレンディピティという言葉のもととなっていることである。セレンディピティという言葉は、一般に「偶然と才気によって、探していなかったものを発見すること」と説明されている。

セレンディピティという言葉の誕生の由来は、18世紀の英国人の文筆家のホレス・ウォルポール伯爵が、彼の知人にあてた手紙の中で、彼が以前読んだ「セレンディップの3人の王子たち」をベースにして、新たに作った造語として使用したことによる、とされている。セレンディップというのは、5世紀頃に、現在のスリランカに存在した王国の名前であり、話の内容はおおよそ以下のようなものである。

昔、セレンディップ王国に3人の有能な王子がいた。王様は当初国内でいろいろな教育を施したが、あるとき、より一層の成長を促すために、3人の王子たちを外国に旅に出すことにした。3人は旅の行く先々で降りかかってくる難問を、持ち前の才気と勇気でもって次々と解決しながら旅を続けた。やがて月日が経ち、いろいろな経験を積んで帰国した王子たちは、それぞれに自分の国を統治する立場になって活躍する、という話である。つまり、出発前に予想もしていなかった課題に取り組んだことが“偶然”に、その課題解決策を見出したことが、“探していなかった物の発見”という解釈につながるわけである。

しかし、私がこの寓話の日本語版の一つを読んだ限りでは、この物語にあまり偶然の要素があるとは感じられなかった。それは、企業や研究機関の生活においても、昨日予想もしていなかった問題に、今日取り組むことになるのは、日常のことであるし、王子たちの問題解決プロセスにも偶然の要素がほとんどないからである。セレンディピティという言葉は、ノーベル賞受賞者がよく引用することで知られている。その場合に、謙遜の意味をこめて、偶然の側面を強調して使うために、この言葉が偶然とか幸運とかいうニュアンスを持つようになったという説があるが、そうなのかも知れない。むしろ、この話で最も強く印象に残ったのは、この3人の王子たちが備えている、謙虚な人柄と、課題解決に取り組むに当たって発揮される優れた資質である。

彼らの課題解決スキルの特徴は、まず豊富な基礎知識を有していることである。旅に出

発する前に、大勢の家庭教師から膨大な量の知識を伝えられていて、そのため、新しい問題に出会った時も、彼らが持っている知識のパターン中から類似のものを選び出すことが出来る。またもう一つの特徴は、観察力が鋭く、問題の検知能力が高いことである。したがって、他の人が見落としているような事象に気づき、論理を構築するに当たって、人より多くの材料を集められることである。その上、分析力と統合力に優れている。自分で集めた材料を分析し、組み立てて、問題の構造を同定し、その解決策を柔軟に発想する。企業の人材としてみても、スーパーマンのように描かれている。

今後、多くの日本企業が生産の海外移転に代表されるような、グローバルに分散した企業構造を持つようになるだろう。ガラス産業もおそらくそのトレンドを避けることは出来ないであろう。今後日本のガラス関連企業が、グローバルに発展して行けるかどうかは、新たな、企業構造の中で、活躍できる人材を育成して行けるかどうかにかかっていると思う。最近ではゴルフや野球の世界に新たなスターが誕生し、どうすればああいう人材を育成できるのだろうか、と話題になっている。ガラス産業も優秀な人材を惹きつけ、経験とともに大きく成長させてゆくような環境を作ってゆくことが求められている。

セレンディピティという言葉の魅力は、“誰の生活にも起こる可能性がある”ということであると言われている。ガラス産業の前途にも、今探していないものが発見され、予測していなかったような発展を遂げることを期待したい。